

意識の国際化に関する研究 (I)

——短大生のホームステイ経験がおよぼす心理的効果——

A Study of “World-Mindedness” (I) : Psychological effects of the homestay experience on mental internationalization in junior college students

(1989年4月7日受理)

北川 歳 昭

Toshiaki Kitagawa

Key words: 意識の国際化 world-mindedness, ホームステイ homestay, 短大生 junior college student

Abstract

This study was designed to investigate the psychological effects of homestay experience. Homestay group students (n=28) and control (non-homestay) group students (n=41) were subjected to the same questionnaire test in June (pre-test) and in September (post-test) 1988.

Homestay effects were found as follows:

- 1) Homestay experience obviously changed the image of “American” to be statistically significantly positive and favorable.
- 2) Homestay experience also changed the image of “Japanese” to be slightly but not significantly positive and favorable.
- 3) Homestay experience made the attitude and intention to welcome and accept foreigners to be obviously and statistically significantly positive.
- 4) Homestay experience slightly but not significantly influenced the opinion and understanding of international issues.

問 題

近年、語学教育、国際化教育の一環として、主として欧米へのホームステイ英語研修プログラムが多くの学校で実施されている。一般に、ホームステイ (homestay) とは、外国の個人の家庭に一定の期間滞在し、日常的な生活を共にしながら、その文化や生活習慣または言語を学ぶことを指しているが、それは、単なるお客様としての観光旅行や集団での修学旅行とは異なった体験を提供するものと考えられている。そのような海外ホームステイとは、学生にとって、いったいどのような体験であり、語学教育・国際化教育上、どのような効果があるのだろうか。また、その効果は、どのようなメカニズムによってもたらされるのだろうか。

ホームステイの実態の分析は、ひとまずおいて、ここでは、ホームステイをとまなう海外研修の効果

を「ホームステイ効果 (homestay effect)」と呼ぶことにする。本研究は、ホームステイ効果の心理的発達の側面を明らかにすることを目的としている。

ホームステイ効果に関する実証的な研究は、現在、まだ極めて少ない。渡辺 (1979) は、中・高校生のホームステイ効果として、英語への興味が増し、滞在先のアメリカ (人) に好感を持ち、友人関係が親密になり、独立心を持つようになったと保護者が判断していることを明らかにした。樋口ら (1982) は、短大生のホームステイ体験が学生自身の価値意識や滞在先 (カナダ人) のイメージを大きく変化させていることを明らかにしている。さらに、樋口 (1983) は、自立、職業選択、性役割同一性などの青年期の発達課題に関して、ホームステイ体験が大きな影響を与え、その効果は、1年半後でも持続していると論じている。

自我発達途上の青年期にそのようなホームステイが体験されること、また、親から初めてしかも物理的にも遠く離れて生活すること、また、未知の世界、異文化・異言語の社会の中に単独で入ることなど、ホームステイの期間がたとえ比較的短期間のものであっても、それが学生の心理的発達に及ぼす影響は決して小さくないように思われる。

ホームステイは、学生たちの心理のどのレベルにどの程度の影響を与えるのであろうか。そこで、ホームステイ効果を測定するために、本研究では、3つの側面からアプローチすることにする。第一に滞在先で実際にふれ合うことになるアメリカ人への対人的感情に代表される情緒的側面である。ホームステイによって、アメリカ人の情緒的イメージがどのように変化するであろうか。第二に、一般的な外国人への態度や行動意図の側面である。すなわち、ホームステイによって、日常生活場面における外国人に対する接近や受容の態度がどのように変わるだろうか。第三は、さらに、より普遍的な効果として、地球規模の発想や思考ないしは国際的な問題に対する理解や認識の側面である。数週間の異文化体験がグローバルな観点を持たせるようなインパクトをもたらすのであろうか。

方 法

ホームステイによる学生の意識の変化を探るため、夏休み (昭和63年7月17日～8月13日) に実施されたアメリカ・カリフォルニア州サンノゼ市でのホームステイ英語研修旅行 (注1) の前後に、そのプログラムに参加した学生 (以後、「ホームステイ群」と呼ぶ) とその比較対照となる学生 (以後、「対照群」と呼ぶ) とに、同一の質問紙形式の意識調査を実施した。

1. 調査時期 1回目 昭和63年6月24日～25日 2回目 昭和63年9月9日～10日

2. 調査対象 中国短期大学英語英文科学生 90名

ホームステイ群: 1年生25名と2年生10名 計35名

対照群: 「心理学」受講者の1年生55名

3. 質問項目

(1) 「アメリカ人」と「日本人」のイメージ

対人的イメージとその変化を探るため、SD法 (Semantic Differential Technique) を用いて、「アメリカ人」と「日本人」という概念 (concepts) の情緒的意味を測定した。SD尺度は、岩下 (1979) が人物conceptの因子分析から析出した対人感情の意味構造を構成する「情緒的評価」「興奮・沈静」「緊張・弛緩」「明・暗」「一般的評価」の5因子から因子負荷量の大きい4項目ずつ選び出したものに、

「アメリカ人」から常識的に連想され「日本人」のイメージと対比されると考えられる5つの形容詞対を加え、計25の形容詞対からなっており、尺度は7段階評定法を採用した(図1参照)。

(2) 外国人への接近的・受容的態度

外国人との具体的な接触の場面を仮想させ、その際の態度の積極さを問うた。

場面1：近所に引っ越してきたアメリカ人家族(白人)に対して、「めんどうなことが起こるかも知れないので不安」から「親しく近所づきあいをしたいので積極的に訪問したい」の4段階評定をさせた。

場面2：駅で困っている外国人旅行者に対して、「見て見ぬふりをする」から「援助を申し出る」までの5段階評定を求めた。

場面3：留学生(白人米人)の日常的な世話を依頼された時、「興味が無いのでことわる」から「積極的に受ける」までの5段階評定をさせた。

(3) 国際的問題に対する認識

学生が、どの程度、世界的(global)な視野に立って国際的問題を理解しているかを探るため、箕浦ら(1988)らが地域住民用に開発した質問項目を学生向きに修正し、新たに1項目追加して、13項目の意見を構成した(表3参照)。各意見に対して「大賛成」から「大反対」までの7段階評定を求めた。

(4) 海外への関心

国際問題への知的関心の度合いを探るため、海外紹介の新聞記事やテレビ番組への関心度を「まったく読まない(みない)」から「関心をもってよく読む(みる)」までの5段階評定をさせた。

(5) 日本人意識

日本人を自覚する程度を「強く意識する」から「まったく考えたことがない」までの4段階評定で求めた。

(6) 英会話能力

英会話能力に対する自信の程度を「まったく自信がない」から「日常会話なら十分話せる自信がある」までの5段階評定で求めた。

結 果

2回の調査に完全に回答した69名(回収率80.6%)を分析の対象とする。そのうち28名はホームステイ経験者(ホームステイ群またはH群)であり、41名はホームステイ未経験者(対照群またはC群)である。6月時の調査を事前(Pre)条件、9月時の調査を事後(Post)条件とすると、Pre-H、Pre-C、Post-H、Post-Cの4条件が構成されることになる。

ホームステイ効果が事前学習や研修参加への動機づけの高さに強く依存しているならば、Pre条件ですでにホームステイ群と対照群の間に大きな差が生じているであろう。しかし、その効果が、異文化接触というリアルな体験によって生じるものならば、群差は、Pre条件では生ぜず、Post条件で明確に生じるであろう。

そこで、各群におけるPre条件とPost条件の差(9月-6月)、および各時点での群差(H群-C群)をみることにする。

1. アメリカ人・日本人のイメージ

表1および表2に、4条件下における両概念のSD法によるイメージ得点(平均値)と条件差および群差のt検定の結果を示す。なお、得点は、岩下(1979)の因子分析の結果をもとに、正負の極(方向)をそろえている。

(1) アメリカ人と日本人のイメージの比較

「アメリカ人」と「日本人」のイメージ(全体平均)をSD尺度上にプロットし、そのプロフィールを描くと、図1のようになる。両概念の差の検定結果は図1の右端に示す。学生たちは、「アメリカ人」と「日本人」のイメージを非常に明確に区別していることがうかがわれる。25項目中、23項目で5%水準以上の有意差があった。

因子レベルでみると、5因子のうち、「情緒的評価」「興奮・沈静」「明・暗」「緊張・弛緩」の3因子のいずれも肯定的(プラス)方向で有意であり、アメリカ人は日本人よりも、好感がもて、興奮的であり、明るく、柔らかいというイメージでとらえられている。しかし、「一般的評価」の因子は、項目によって評価の方向が異なっており、アメリカ人は、日本人よりも、美しいが、高尚とはいえないと受けとめられている。また同様に、「緊張・弛緩」の因子においても、内部項目間に一貫性がなく、アメリカ人は、日本人よりも、やわらかで、のんびりしているが、はげしく、力強いととらえられている。

その他の項目では、一般的に考えられているように、アメリカ人は、日本人と比べて、広く、大きく、開放的であるが、反面、ルーズで、危険でもある、というイメージでとらえられている。

(2) アメリカ人のイメージの変化

表1に「アメリカ人」に対する4条件下のSD尺度得点の平均値とその差の検定結果を示す。

1) 6月と9月の差 対照群において有意な変化があったのは、「あたたかい」「おどけた」「やわらかな」「広い」の4項目であったのに対して、ホームステイ群では、「好き」「親しみやすい」「あたたかい」「ホットな」「明朗な」「やわらかな」「安全な」の8項目であった。因子レベルでは、対照群が「明・暗」においてのみ有意な変化があったのに対して、ホームステイ群は、「情緒的評価」と「一般的評価」の因子において、有意な変化が認められた。また、全25項目の総平均値でも、対照群には変化が認められないのに対して、ホームステイ群には0.1%水準で有意な変化が認められ

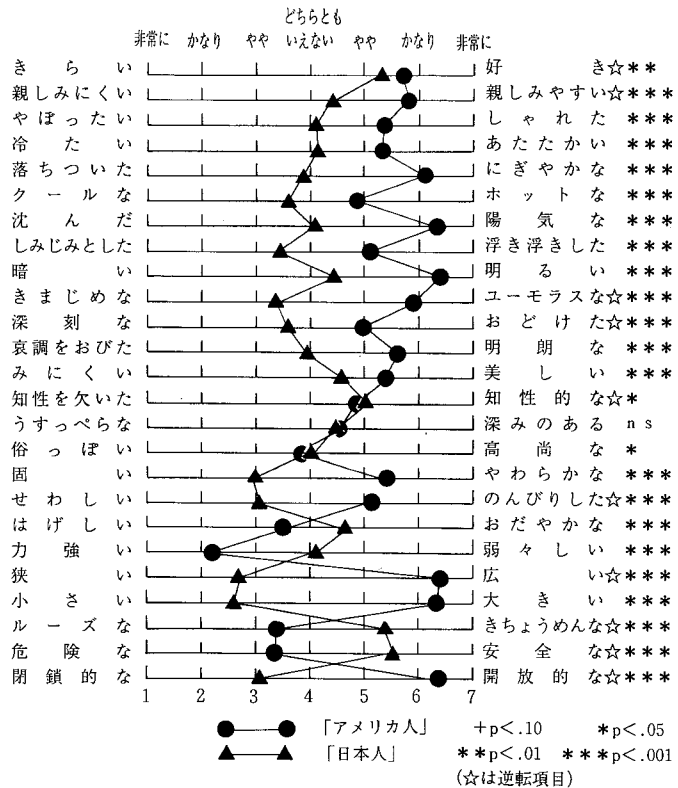


図1 「アメリカ人」と「日本人」のイメージ・プロフィールおよびその差のt検定の結果 (☆は逆転項目)

た。

2) ホームステイ群と対照群の差 6月時において両群間に有意な差があったのは、「あたたかい」と「ホットな」の2項目のみであった。いずれも、ホームステイ群が肯定的であった。また、因子レベルでは、有意な群差はなかった。ところが、9月時においては、両群間に有意差が認められた項目は、「好き」「親しみやすい」「あたたかい」「にぎやかな (-)」「ユーモラスな (-)」「おどけた (-)」「ホットな」「深みのある」「きちょうめんな」「安全な」の10項目にのぼった。因子レベルでは、「情緒的評価」「明・暗 (-)」「一般的評価」「緊張・弛緩」の4因子において、有意な群差があった。また、全25項目の総平均値においても、6月時では群差がなかったのに対して、9月には1%水準で有意な群差が認められた。すなわち、6月時においては、群間の差はとるに足らないものであったのに対して、9月時には群差は明らかになり、ホームステイ群は対照群よりも、アメリカ人に対して肯定的・好意的・積極的な方向にイメージを変えていた。

以上より、アメリカ人に対するイメージは、ホームステイ体験によって好意的方向に明確に変化したといっていよう。

なお、群差において、ホームステイ群が対照群よりも肯定的な方向への変化が多いなかで、「興奮・沈静」因子の「にぎやかな」、 「明・暗」因子の「ユーモラスな」と「おどけた」の3項目に関しては、H群がC群よりも有意に否定的であるのは注目に値する。

(3) 日本人のイメージの変化

表2に「日本人」に対するSD尺度得点平均値とその差の検定結果を示す。

1) 6月と9月の差 対照群は、いずれの項目においても有意な変化はない。一方、ホームステイ群においても、「しゃれた」と「陽気な」の2項目において、日本人のイメージが肯定的方向にやや変化した傾向が見られるものの、十分な有意性は得られなかった。概して、日本人に対しては、大きなイメージの変化がなかったといえよう。そこで、変化の方向を吟味するため、肯定的変化(+)と否定的変化(-)の割合を比較する。因子レベルでみると、対照群の日本人イメージは、5因子のうち、「情緒的評価」「興奮・沈静」「明・暗」「緊張・弛緩」の4因子において、否定的変化であったのに対して、ホームステイ群では、アメリカ人のイメージ変化と同様、5因子すべてにおいて肯定的変化があった。この差は有意である($\chi^2=6.67$, $df=1$, $p<.01$)。

2) ホームステイ群と対照群の差 6月時に両群間に有意な差があったのは、「安全な」の項目のみであり、ホームステイ群は、対照群よりも、日本人に対して安全なイメージをもっていた。

9月時に有意差が認められたのは、「しゃれた」「陽気な」および「明朗な」の3項目であり、いずれも、ホームステイ群が対照群よりも日本人のイメージを肯定的にとらえている。

因子レベルで群間の差をみると、ホームステイ群の方が肯定的な因子は、6月時に、5因子中「一般的評価」の1因子のみであったのに対し、9月時には、その割合が逆転し、「緊張・弛緩」を除く4因子が肯定的であった。しかし、この変化は統計的に十分ではない($\chi^2=3.60$, $df=1$, $p<.10$)。

以上より、日本人に対するイメージは、アメリカ人に対するイメージほど明瞭な変化はない。特に、対照群においては、まったく変化していないといっていよう。しかし、ホームステイ群においては、6月時においてやや否定的であった日本人のイメージが、帰国後の9月にはやや肯定的に変化しており、対照群との差が開く傾向があることに注目しておきたい。

表1. アメリカ人のイメージ (SD尺度得点の平均値) および各条件間の差のt検定の結果

因子	SD尺度項目 (→方向が高得点) (☆印は逆転項目)	対照群(41人)		ホームステイ群(28人)		全体平均 69人×2 ALL	[9月-6月]の差 対照群 ホームステイ群 C(Po-Pr) H(Po-Pr)		[H群-C群]の差 6月 9月 Pr(H-C) Po(H-C)		アメリカ人と日本人の イメージの差 ALL(A-J)
		6月 Pr-C	9月 Po-C	6月 Pr-H	9月 Po-H		6月 Pr(H-C)	9月 Po(H-C)			
情緒的 評価	→好き☆	5.67	5.56	5.39	6.29	5.71	-.11	.89***	-.27	.72**	.40**
	→親しみやすい☆	5.66	5.73	5.54	6.36	5.80	.07	.82**	-.12	.63*	1.43***
	→しゃれた	5.46	5.44	5.21	5.39	5.39	-.02	.18	-.25	-.05	1.25***
	→あたたかい	4.71	5.22	5.39	6.11	5.28	.51*	.71*	.69*	.89**	1.06***
	「情緒的評価」平均	5.37	5.49	5.38	6.04	5.54	.11	.65**	.01	.55**	1.03***
興奮・沈 静	→にぎやかな☆	6.15	6.39	5.79	5.93	6.10	.24	.14	-.36	-.46**	2.25***
	→ホットな	4.17	4.51	4.96	5.85	4.77	.34	.89**	.79*	1.34**	1.15***
	→陽気な	6.22	6.34	6.21	6.36	6.28	.12	.14	-.01	.02	2.21***
	→浮き浮きした☆	4.98	5.17	5.14	5.07	5.09	.20	-.07	.17	-.10	1.68***
	「興奮・沈静」平均	5.38	5.60	5.53	5.80	5.56	.23	.27	.15	.19	1.82***
明・暗	→明るい☆	6.41	6.51	6.21	6.29	6.38	.10	.07	-.20	-.23	1.95***
	→ユーモラスな☆	5.93	6.27	5.50	5.64	5.88	.34	.14	-.43	-.63*	2.51***
	→おどけた☆	4.83	5.51	4.54	4.86	4.98	.68*	.32	-.29	-.66*	1.44***
	→明朗な	5.44	5.80	5.36	5.75	5.60	.37	.39*	-.08	-.05	1.65***
	「明・暗」平均	5.66	6.02	5.40	5.63	5.71	.37*	.23	-.25	-.39*	1.89***
一般 的 評価	→美しい☆	5.24	5.54	5.25	5.50	5.38	.39	.25	.01	-.04	.80***
	→知性的な☆	4.71	4.71	4.71	5.29	4.83	.00	.57+	.01	.58+	-.24+
	→深みのある	4.29	4.37	4.56	5.04	4.52	.07	.48+	.26	.67*	.03
	→高尚な	3.71	3.68	3.79	4.32	3.84	-.02	.54+	.08	.64+	-.28
	「一般的评价」平均	4.49	4.57	4.58	5.04	4.64	.09	.46*	.09	.46*	.07
緊張・弛 緩	→やわらかな	5.24	5.76	5.07	5.82	5.48	.51*	.75**	-.17	.07**	2.53***
	→のんびりした☆	4.95	5.10	5.14	5.68	5.18	.15	.54	.19	.58	2.16***
	→おだやかな	3.39	3.17	3.54	4.00	3.48	-.22	.46	.15	.83+	-.1.20***
	→弱々しい	2.34	1.95	2.43	2.11	2.20	-.39+	-.32	.09	.16	-.1.97***
	「緊張・弛緩」平均	3.98	3.99	4.04	4.40	4.08	.01	.36+	.06	.41*	.37***
その他	→広い☆	6.12	6.61	6.46	6.64	6.44	.49**	.18	.34	.03	3.74***
	→大きな	6.17	6.24	6.25	6.61	6.30	.07	.36	.08	.36+	3.68***
	→きょうめんな☆	3.34	2.98	3.50	3.71	3.34	-.37	.21	.16	.74*	-.2.07***
	→安全な☆	3.17	2.85	3.18	4.29	3.30	-.32	1.11**	.01	1.43***	-.2.26***
	→開放的な☆	6.17	6.46	6.32	6.57	6.37	.29	.25	.15	.11	3.30***
全25項目の総平均(4~28)	4.78	4.92	4.83	5.21	4.92	.13	.38***	.04	.29**	1.05***	

t検定の結果 +p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

表2. 日本人のイメージ (SD尺度得点の平均値) および各条件間の差のt検定の結果

因子	SD尺度項目 (→方向が高得点) (☆印は逆転項目)	対照群(41人)		ホームステイ群(28人)		全体平均 69人×2 ALL	[9月-6月]の差		[H群-C群]の差	
		6月	9月	6月	9月		対照群	ホームステイ群	6月	9月
		Pr-C	Po-C	Pr-H	Po-H		C(Po-Pr)	H(Po-Pr)	Pr(H-C)	Po(H-C)
情緒的評価	→好き☆	5.41	5.39	5.18	5.18	5.31	-.02	.00	-.24	-.21
	→親しみやすい☆	4.54	4.34	4.29	4.25	4.37	-.20	.04	-.25	-.09
	→しゃれた	4.07	3.88	4.07	4.68	4.14	-.20	.61+	.00	.80*
	→あたたかい	4.05	4.29	4.04	4.54	4.22	.24	.50	-.01	.24
	「情緒的評価」平均	4.52	4.48	4.39	4.66	4.51	-.04	.27	-.13	.19
興奮・沈静	→にぎやかな☆	3.95	4.00	3.39	3.96	3.85	.05	.57	-.56+	-.04
	→ホットな	3.54	3.55	3.71	3.75	3.62	.01	.04	.18	.20
	→陽気な	4.10	3.88	3.93	4.43	4.07	-.22	.50+	-.17	.55*
	→浮き浮きした☆	3.39	3.33	3.52	3.48	3.41	-.07	-.04	.13	.16
	「興奮・沈静」平均	3.74	3.70	3.62	3.91	3.74	-.05	.29	-.12	.22
明・暗	→明るい☆	4.39	4.34	4.32	4.71	4.43	-.05	.39	-.07	.37
	→ユーモラスな☆	3.51	3.37	3.07	3.46	3.37	-.15	.39	-.44	.10
	→おどけた☆	3.68	3.54	3.46	3.43	3.54	-.15	-.04	-.22	-.11
	→明朗な	3.80	3.76	4.04	4.36	3.95	-.05	.32	.23	.60*
	「明・暗」平均	3.85	3.75	3.72	3.99	3.82	-.10	.27	-.12	.24
一般的評価	→美しい☆	4.54	4.73	4.44	4.57	4.58	.20	.13	-.09	-.16
	→知性的な☆	4.88	5.10	5.07	5.32	5.07	.22	.25	.19	.22
	→深みのある	4.39	4.53	4.46	4.61	4.49	.13	.14	.07	.08
	→高尚な	4.02	4.05	4.14	4.32	4.12	.02	.18	.12	.27
	「一般的評価」平均	4.46	4.61	4.54	4.71	4.57	.15	.17	.08	.09
緊張・弛緩	→やわらかな	2.98	3.05	2.79	2.93	2.95	.07	.14	-.19	-.12
	→のんびりした☆	3.24	3.17	2.71	2.79	3.02	-.07	.07	-.53	-.39
	→おだやかな	4.76	4.71	4.64	4.57	4.68	-.05	-.07	-.11	-.14
	→弱々しい	4.24	4.22	4.07	4.11	4.17	-.02	-.04	-.17	-.11
	「緊張・弛緩」平均	3.80	3.79	3.55	3.60	3.71	-.02	.04	-.25+	-.19
その他	→広い☆	2.88	2.76	2.61	2.43	2.70	-.12	-.18	-.27	-.33
	→大きい	2.88	2.56	2.64	2.29	2.62	-.32	-.36	-.24	-.28
	→きちようめんな☆	5.10	5.46	5.54	5.68	5.41	.37	.14	.44	.22
	→安全な☆	5.22	5.56	5.96	5.64	5.56	.34	-.32	.74*	.08
	→開放的な☆	3.02	2.95	3.18	3.21	3.07	-.07	.04	.15	.26
全25項目の総平均(4~28)	3.87	3.87	3.82	3.95	3.87	.00	.13	-.05	-.09	

t検定の結果 +p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

2. 外国人への接近および受容的態度

外国人への態度については表3-Iに示す。

1) 6月と9月の差 3項目で、両群とも外国人に対する積極的方向に変化しているものの、3項目の合成平均値でみると、ホームステイ群のみ、その変化が有意である。

2) ホームステイ群と対照群の差 6月時には「留学生の世話」、9月時には「駅で外国人」の項目で、いずれもホームステイ群が対照群よりも有意に積極的であるが、3項目を合成すると、9月時のみ、有意にホームステイ群が高い。

以上より、ホームステイ体験は、外国人に対する積極的で受容的な態度の形成に効果があったと考えられる。

3. 国際問題への認識

国際問題に関する認識についての結果は表3-IIに示す。全13項目のうち、有意性が認められる変化はなく、有意な群差も、6月時の「気心のわかるのは同一人種同士(-)」と9月時の「東南アジアからの移民反対」の2項目のみであり、いずれも、ホームステイ群の方が対照群よりも、国際的な視点による理解の方向と認められる回答であった。

箕浦ら(1988)に従って因子レベルでみると、「地球市民的意識」と「脱自民族意識」は、いずれも、対照群よりもホームステイ群の方が得点が高い傾向があるが、その変化の量は、ホームステイ群の方が多いとはいえない。「非戦心情」については、対照群の9月がやや高くなっているものの、有意ではない。

全般的に、両群とも、6月よりも9月の方が国際問題に対するグローバルな認識をする傾向があり、ホームステイ群の方がややその傾向が強い傾向があるが、十分な有意性は得られなかった。

4. その他の項目

(1) 海外への関心

全般的に、活字や映像等による海外情報への関心(表3-III)は、あまり高くない。ホームステイ群の方が帰国後の海外への関心がやや高まる傾向はあるものの、その差は有意ではない。

ホームステイ体験は、マスコミ接触という形での海外への関心を高めたとはいえない。

(2) 日本人意識

いずれの時点でも、ホームステイ群が、対照群よりも日本人を意識する傾向が見られるものの(表3-IV)、統計的に有意ではない。

(3) 英会話能力

英会話能力を自己評価させたところ(表3-V)、全般的に自信をもっていないものの、ホームステイ群の9月時に得点が劇的に高くなっており、有意に自己評価を高めている。

英語能力への自信に関しては、明らかにホームステイ効果が生じているといってよいだろう。しかし、実際に英語力が向上しているかどうかは、この質問だけではわからない(注1)。

表3. 対照群およびホームステイ群の各条件下の平均値および各条件間の差のt検定の結果

項目 (要旨)	対照群 (41人)			ホームステイ群 (28人)			全体平均 (69人×2)		[9月-6月]の差			[H群-C群]の差		
	6月	9月	Pr-C	6月	9月	Pr-H	A	L	C (Po-Pr)	H (Po-Pr)	Pr (H-C)	6月	9月	Po (H-C)
I. 外国人への接近および受容の態度														
近所への米国家族 →積極的に訪問したい	3.49	3.59	3.64	3.67	3.58	.10	.02	.16	.08	.16	.08	.16	.08	.08
駅で外国人旅行者 →援助を申し出る	3.33	3.51	3.18	4.22	3.53	.19	1.04***	-.15	.71**	-.15	.71**	-.15	.71**	.71**
留学生の世話の依頼 →積極的に受けたい	2.51	2.88	2.96	3.15	2.84	.37*	.18	.45*	.27	.45*	.27	.45*	.27	.27
「接近、受容の態度」3項目 (55+56+57)の平均	3.11	3.33	3.26	3.68	3.32	.22	.42*	.15	.35*	.15	.35*	.15	.35*	.35*
II. 国際問題への認識														
外国人難民を受け入れるべき →大賛成☆	4.63	5.00	4.89	5.04	4.88	.37	.15	.25	.04	.25	.04	.25	.04	.04
世界市民であることを第一に →大賛成☆	5.22	5.60	5.21	5.39	5.36	.38+	.18	-.01	-.21	-.01	-.21	-.01	-.21	-.21
世界中同じ生活水準に →大賛成☆	4.12	4.20	4.50	4.61	4.32	.08	.11	.38	.41	.38	.41	.38	.41	.41
東南アジアからの移民反対 →大反対	3.78	3.88	4.00	4.61	4.02	.09	.61+	.22	.73*	.22	.73*	.22	.73*	.73*
「地球市民意識」4項目 (67+61+64+58)の平均	4.44	4.68	4.65	4.91	4.65	.24	.26	.22	.24	.22	.24	.22	.24	.24
気心のわかるのは同一人種同士 →大反対	4.85	5.13	5.46	5.64	5.22	.27	.18	.61*	.52	.61*	.52	.61*	.52	.52
日本人は知能指数が比較的高い →大反対	3.66	3.80	3.75	3.86	3.76	.14	.11	.09	.06	.09	.06	.09	.06	.06
「脱自民族意識」2項目 (63+66)の平均	4.26	4.46	4.61	4.75	4.49	.21	.14	.35	.29	.35	.29	.35	.29	.29
日本を守るため喜んで戦うべき →大反対	5.17	5.50	5.29	5.32	5.32	.33	.04	.11	-.18	.11	-.18	.11	-.18	-.18
戦争は絶対に正しくない →大賛成☆	6.15	6.32	6.18	6.29	6.23	.17	.11	.03	-.03	.03	-.03	.03	-.03	-.03
「非戦心構」2項目 (59+68)の平均	5.66	5.90	5.73	5.80	5.78	.24	.07	.07	-.10	.07	-.10	.07	-.10	-.10
損な国際貿易協定への参加反対 →大反対	4.12	4.10	4.11	4.43	4.18	-.02	.32	-.01	.33	-.01	.33	-.01	.33	.33
差別的な団体には抗議すべき →大賛成☆	5.68	5.80	5.68	5.93	5.77	.12	.25	.00	.13	.00	.13	.00	.13	.13
日本人は日本に関心を持つべき →大反対	3.22	3.35	3.61	3.57	3.41	.13	-.04	.36	.22	.36	.22	.36	.22	.22
人間同士、似通った点の方が多い →大賛成☆	5.02	5.02	4.82	5.36	5.05	.00	.54+	-.20	.33	-.20	.33	-.20	.33	.33
結婚の相手は日本人の方がよい →大反対	4.00	3.95	4.11	4.36	4.08	-.05	.25	.11	.41	.11	.41	.11	.41	.41
「国際問題への認識」3項目 (58~70)の平均	4.26	4.39	4.40	4.60	4.40	.13	.20	.14	.21	.14	.21	.14	.21	.21
III. 海外への関心														
海外新聞記事 →関心もってよく読む☆	2.90	3.02	2.52	2.75	2.83	.12	.23	-.38	-.27	-.38	-.27	-.38	-.27	-.27
海外紹介テレビ番組 →関心もってよくみる☆	3.20	3.32	3.11	3.46	3.27	.12	.35	-.08	.15	-.08	.15	-.08	.15	.15
「海外関心度」2項目 (71+72)の平均	3.05	3.17	2.81	3.11	3.05	.12	.29	-.23	-.06	-.23	-.06	-.23	-.06	-.06
IV. 日本人意識														
日本人意識 →強く意識する☆	2.39	2.37	2.46	2.52	2.42	-.02	.05	.07	.15	.07	.15	.07	.15	.15
V. 英会話能力自己評価														
英会話能力 →自信がある☆	2.07	2.17	1.89	2.85	2.22	.10	.96***	-.18	.68***	-.18	.68***	-.18	.68***	.68***

t検定の結果 +p<.10 **p<.05 ***p<.001

考 察

1. ホームステイ効果の情緒的側面について

ホームステイ先で接触した「アメリカ人」のイメージは、好意的・肯定的な方向に明らかに変化した。ホームステイ体験は、情緒的レベルにおける変化を引き起こすのに十分な効果があったといえる。このような変化は、語学学習や外国人との人間関係に対して積極的な姿勢や動機づけをもたらすものである。

ホームステイ群に比べ、対照群は、アメリカ人をにぎやかでユーモラスでおどけた、といった軽薄なイメージでとらえていたが、これは、昨今、お笑い番組に出演する人気アメリカ人タレントなどの影響によるステレオタイプなのかもしれない。また、アメリカ人が危険だというイメージも、テレビ等のマスコミを通して形成されたものであろうが、ホームステイ群は、自らの体験を通してそれらのステレオタイプのイメージを訂正している様子が見られる。

日本人のイメージも、統計的には不十分であるが、ホームステイ群においては肯定的に変化する傾向がみられた。同様に、日本人意識についても、ホームステイ群において、統計的には十分とはいえなかったが、日本人意識がやや高まる傾向が見られた。これらは、ホームステイが、外国人を知ることによって、新たな観点から日本人そして自分自身を見直すという「国際的自我」の発達機会となりうる証拠の一つといえるのではないだろうか。

2. ホームステイ効果の態度・行動的側面について

外国人への接近的・受容的態度に関しても、ホームステイ群に有意な変化があった。北川ら (1987) は、地域住民の調査から、海外への関心が高く、実際に海外経験があっても、それが自分の生活圏への外国人受容度を高めることに単純にはつながらないと論じた。確かに、海外経験といえどもその内容が問題なのであるが、本研究の結果から、ホームステイという形の海外経験は、外国人に対する受容的態度を形成するに効果があったといえるだろう。もちろん、これが実際行動のレベルでも変化が生じているかどうかを知るためには、さらに追跡調査が必要である。

3. ホームステイ効果の認知的側面について

ホームステイ体験は、グローバルな視野を持つにいたる認知的変化に関しては十分な効果があったとはいえない。箕浦ら (1987;1988) が論ずるように、意識の国際化は、究極的には、「国の殻を破り、地球市民的発想をもつことで、国益ではなくて人類益をめざす思想」になると考えられる。そして、そのような意識の転換を、箕浦らは、「意識の世界化 (world-mindedness)」と呼んでいる。

このような視点の移動や視野の広がりを必要とする認知的側面での変化が生じなかったのは、3週間程度のホームステイあるいは1カ月ほどの海外経験では十分でなかったためなのだろうか、それとも、期間の長さの問題ではなく、その体験の内容が不十分・不適切だったためなのだろうか。また、北川ら (1988) が指摘したように、「意識の世界化」が知的関心や論理性といった知的要因に依存しているならば、語学技能の向上を主目的とするホームステイのあり方、また、事前指導における学生たちへの関心のもたせ方に限界があったのかもしれない。

「意識の国際化」とは、ちょうど、自己中心的 (egocentric) である子どもが、他者や環境との交わりの中で様々な困難と出あい、葛藤を経験しながら、より高次の新しい認識と自我を形成し、脱中心化 (decentration) が促されて心理的に発達していく姿と似ている。我々が外国人との生の接触を通して認知的葛藤を克服し、自国中心的な認識 (nationalism または ethnocentrism) から脱却すること、すなわち、「国家的・民族的自我」からの脱中心化が真の意識の国際化つまり「意識の世界化」なのである。

外国に行ってもおいしいものを食べて買い物もしたいが、その国が抱えている問題を知ろうとは思わないし、人類全体・地球全体のことに関心をもつこともないという日本人の非国際性が問題になっているが、この「意識の世界化」が国際化教育の今後の大きなテーマになるであろう。

要 約

本研究は、ホームステイ経験がおよぼす心理学的効果を「意識の国際化」の観点から考察したものである。ホームステイ参加の英文科学生28名 (ホームステイ群) と不参加の英文科学生41名 (対照群) に対して1988年6月 (pre-test) と9月 (post-test) に質問紙形式の調査が繰り返し実施された。得られた結果は次の通りである。

- 1) ホームステイ群において、「アメリカ人」に対するイメージが肯定的方向に有意に変化した。
- 2) ホームステイ群において、「日本人」に対するイメージも肯定的方向で変化する傾向があったが、その変化は有意ではなかった。
- 3) ホームステイ群は、外国人に対する受容的態度に関して有意に積極的になった。
- 4) ホームステイ群は、国際問題に関する理解や認識に関して、肯定的な方向に変化する傾向があったが、統計的に十分な変化ではなかった。

ホームステイ効果は、情緒や態度のレベルでは、十分な影響力があるが、認知的なレベルではその影響力が十分とはいえないことが示唆された。

注1) 本学のホームステイ英語研修旅行の日程および英語能力へのホームステイ効果に関しては、上斗ら (1989) を参照されたい。

文 献

- 樋口勝也 1983 短大生の異文化体験 文化と人間の会 (編) 異文化との出会い 川島書店 53-69.
- 樋口勝也, 斎藤栄二, M. ラマーシュ, R. シェランガー 菊地章夫 1982 短大生の異文化体験——ホームステイプログラムの効果—— 桜の聖母短期大学紀要 7号 147-155.
- 岩下豊彦 1979 オズグッドの意味論とSD法 川島書店.
- 上斗晶代, 沼本健二 1989 アメリカホームステイの英語力への効果(I) 中国短期大学紀要 20号 165-177.
- 北川歳昭, 箕浦康子 1987 外国人受容度とその規定因(2) ——中都市近郊団地住民の国際感覚II—— 日本心理学会第51回大会発表論文集 658.

意識の国際化に関する研究 (I)

- 北川歳昭, 箕浦康子, 福森 護 1988 「意識の世界化」その関係要因——国際性についての社会心理学的アプローチ (II)—— 日本心理学会第52回大会発表論文集 234.
- 箕浦康子, 北川歳昭 1987 外国人受容度とその規定因(1) ——中都市近郊団地住民の国際感覚I —— 日本心理学会第51回大会発表論文集 675.
- 箕浦康子, 北川歳昭, 福森 護 1988 「意識の世界化」尺度化の試み——国際性についての社会心理学的アプローチ (I)—— 日本心理学会第52回大会発表論文集 233.
- 渡辺嘉子 1979 中・高生のホームステイの効果 英語教育 6月号 8-13.